

箭山紀行

「和与石」は見えていた！ 『如意宝珠』の約束を

『修験道』という言葉は、だれでも聞いたことがあると思いますが、どのようなものかを知る機会はなかなかありません。広辞苑によると、「役小角を祖と仰ぐ日本仏教の一派。日本古来の山岳信仰に基づくもので、もともと山中の修行による呪力の獲得を目的としたが、後世の教義では、自然との一体化による即身成仏を重視する」とあります。全国に修験の山は何ヶ所かありますが、実は「八面山」もその修験の霊場だったのです。

衆生済度の願いをもつて唐土(中国)にわたつて帰国した八幡大菩薩は、宇佐の小倉山で北辰の神に、衆生利益(一切のいきもの)に幸せを与える)の方法を尋ねました。すると北辰の神からは英彦山権現の『如意宝珠』によつて一切の衆生を救いなさいというお告げをうけました。そこでさつそく英彦山に向つたのです。

八幡大菩薩は翁の姿になって、英彦山権現に参拝してこの山にやつてきた訳を話し、如

○編集・発行 三光周辺地域振興対策推進会議
「グローカルネット三光」
○連絡先 中津市三光支所内事務局 Ⅷ43-2050

意宝珠を是非
いただきたい
とお願ひした
のです。する
とこの英彦山
で修行中であ
つた法蓮が、
権現の如意宝
珠は私もまだ
見たことがな
いと言いまし
た。そこで権
現が修法する
と、斑模様
の蛇が光り輝く
珠を口にくわ
えて岩屋のな
かから出てき
ました。翁姿
の八幡大菩薩
は「この珠を
わたしに与え
てください」と
頼みますが、
法蓮聖人はこ
れを断ります。



八面山のふもとから「和与石」が確認できる



「和与石」

ところが、翁が去つたあと宝珠がなくなつていたので。怒つた法蓮聖人は、般若智印を結んで四方に投げ、火界真言を念ずると、翁の逃げ道に火の手が上がつて逃げる事ができず、英彦山権現に戻り宝珠を返したのです。そして、「心ゆくとき、この宝珠を渡してほしい」と頼むのでした。法蓮聖人には渡す気持ちはなかつたのですが、その熱心さに打たれ、なまじいに承諾してしまいました。翁は喜んで立ち去りますが、またしても翁がいなくなった後、宝珠がなくなつていたので。大いに怒つた法蓮聖人は、今度は自身で追いかけて、下毛郡諫山郷の南の高山に登つて大きな声で問責しました。その声はなんと伊予国(愛媛県)の石槌山にまで聞こえるほどでした。

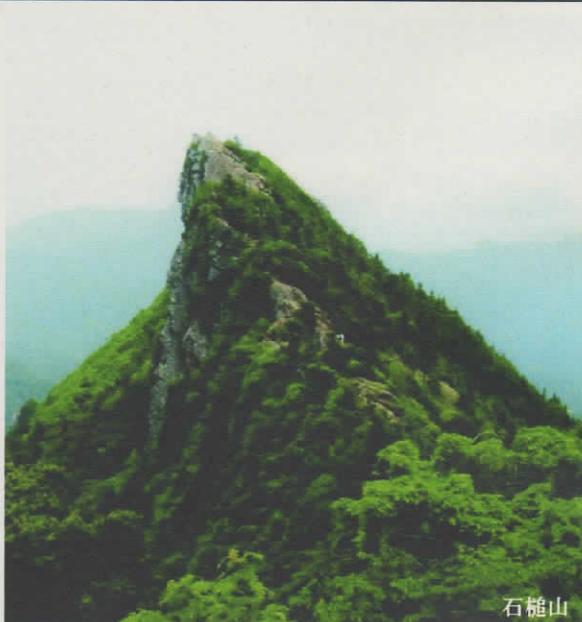
翁(八幡大菩薩)は、金色の鷹になって、金色の犬を召し連れて高山に飛び返ってきました。そして、「私は八幡大菩薩である。この宝珠を得て一切の生きとし生けるものを救いたいと念じている。私が宇佐に垂迹した時にはあなたを神宮寺の別当に任せよう。どうか同じ心で天下を静護しようではないか」と聖人に語りかけました。法蓮聖人もこのことばを聞いて和与(和解)が成立し、八幡大菩薩は宝珠を永久に得ることができたということです。

この法蓮聖人と八幡大菩薩の話し合いの場となった下毛郡諫山郷の南の高山というのが実は八面山のことです。話し合いが行われた大きな岩こそが、『和与石』と名付けられた大岩なのです。この岩の横に立つと、私たちの三光地区が眼下に広がり、さらに周防灘に面した豊前地方全体、はるか西方には英彦山、そして東には宇佐地方までも望むことができます。八面山の和与石はこの物語を治めるにふさわしい場所にあるのです。

今回のお話は、箭山神社宮司樺木晋一郎氏の家に伝わる「八面山縁起序」のなかの十三〜十六葉にある「和与石之事」から引用させていただきました。

衆生済度(注) 八幡大菩薩(八幡神(応神天皇))に奉った称号。奈良時代にはじまった神仏習合(日本固有の神の信仰と仏教信仰とがまざりあった考え方)の結果、このような称号がおこった。

衆生済度 八幡大菩薩(八幡神(応神天皇))に奉った称号。奈良時代にはじまった神仏習合(日本固有の神の信仰と仏教信仰とがまざりあった考え方)の結果、このような称号がおこった。



石槌山

権現 八幡・菩薩が衆生を救うために種々の姿をとって権に現れること。

如意宝珠 あらゆる願いを叶える不思議な珠。衆生を利益すること限りないことから仏や仏説の象徴とされる。

修法 密教で、加持祈祷などの法。壇を設け、本尊を請じ、真言を唱え、手に印を結び心に本尊を観じて行う。

般若智印 仏教で真理を認識し、悟りを開くはたらき。仏・菩薩の智の標示である印。

火界真言 不動明王の呪。不動明王の姿から無量の火焰が流出している様子を観想しながら唱える呪文。

石槌山 愛媛県東部にあり、四国の中で最も高い山。標高一九八二m。修験道の霊場として有名。八面山からは約一八〇キロ。

垂迹 八幡・菩薩が衆生済度の為に神の姿になって現れること。

英彦山 福岡県と大分県にまたがる山。標高一二〇〇m。これも修験道の大道場。八面山からは西方に約三〇キロ。

『水墨画の八面山』

私が水墨画をはじめたのは、六十歳の定年を迎えたのちでした。それまでも、色々な絵を鑑賞することが好きだった私は、ある時、画家の山根峰雲氏と出会ったのです。この人の作品を見て、故郷の八面山を水墨画で描いてみたいと思うようになり、筆を持ちました。ただこの自然いっぱい八面山を表現するのは、難しく、何度も何度も描き直した末の初作品がこの八面山です。この画を日中水墨画交流会に入会して三年後「大分の八面山」と題して出品したところ、初めての賞を頂きました。その後、多くの作品も出来て、平成十八年度に万葉の里やまくに水墨画コンテストに出展した「猿飛千壺峡の秋」が最優秀賞を頂きました。

八面山が我が家から毎日見えるからこそ水墨画で描くことに挑戦できたと思います。

今後は、孫たちと八面山スケッチ大会にも参加したいと思えます。



白木 原田昭年さん